26H-pm05

高齢者の服薬上の問題点と薬剤師による薬剤管理指導の効果に関する研究

○坂巻　弘之[1], 出石　啓治[2], 飯島　康典[2], 岩月　進[2], 大木　一正[2], 小田　利郎[2], 加藤　久幸[2], 菅濱　淳仁[2], 土屋　文人[2], 寺脇　康文[2], 保科　滋明[2], 山田　卓郎[2], 山本　信夫[2]([1]名城大薬, [2]日本薬剤師会)

【目的】在宅療養中の高齢者等が抱える服薬上の諸問題とそれらの問題に対する薬剤師の居宅サービスの効果を検討することを目的とし、全国調査に先立つ予備的調査として行った。

【方法】あらかじめ在宅訪問薬剤管理指導等を積極的に実施している保険薬局 23 施設、病院薬剤部 15 施設を選択し、自記式・郵送法のアンケート調査を行った。調査票は、施設属性、在宅訪問薬剤管理指導等の実施状況を調査する「施設票」、個々の薬剤師が訪問している患者について、患者属性、服薬指導前後の服薬上の問題等を把握する「患者票」からなり、2007 年 9 月に調査を行った。

【結果】調査票回収状況は、施設票回収率 81.6%（31/38）、患者票 812 件の回収であった。薬剤師の訪問開始時に発見された在宅患者の服薬上の問題は、「薬剤の保管」が 57.3%と最も多く、次いで「理解不足」（46.4%）、「飲み忘れ」（35.7%）の順であった。「飲み忘れ」と（飲みにくいなどの理由による）「飲み残し」の薬剤費は、患者 1 人当たりの平均でみると医療費の 24%を占め、金額では 3 千円あまりと推計された。この金額をもとに日本全体の 75 歳以上の後期高齢者における潜在的な飲み忘れ等の金額を計算すると数億円と推計された。

【考察および結論】後期高齢者医療保険制度の設計においては、75 歳以上高齢者の投薬の多数・重複の問題が指摘されており、薬剤師の在宅への積極的な関与が重要である。調査の結果、高齢者の大半がなんらかの服薬上の問題を抱えていることが明らかとなった。それらの問題に対して薬剤師が関与することによって改善が見られ、その経済的な効果は多額なものとなることが推察され、薬剤師の薬剤管理指導の重要性が明らかとなった。